政策提言 1

地域づくり表彰事業等のコンテストで
好評価を獲得する方法

地域団体が地域づくり等の表彰事業やモデル補助事業などに応募し、コンテスト形式で受賞や事業採択を競い合う機会が増えている。受賞をすれば取り組んでいる地域住民の誇りとなり、更なる活動の活性化につながる。また全国から注目され説明する機会が増えることで、自らの取り組みをさらに見つめ直す機会にもなる。また新規事業採択では、新たな取り組みを開始するための補助金や事業バックアップが期待できる。これらのコンテストに勝ち抜くためにはもちろんその中身が肝要であるが、工夫を凝らして申請準備をすることで上手くアピールして加点を得たり減点を避けることが可能となる。これまでのコンテストで評価された地域づくりのアピールポイントを分析した後、①自分たちの取り組みの何が素晴らしいのかストーリーを明快に説明する。②審査基準に合わせて申請書の書き方を工夫する。③行政職員や高齢者ではなく、若者、女性などが当事者として生き生きとした発表する。④パワーポイントに振り回された発表をしない。⑤多くの住民で審査会や現地調査に望み、地域の連帯と意気込みを示す、などが有効であることを示す。これらの点に地域団体が工夫し、配慮することで、好評価が得られる可能性が高い。

平成 31 年 3 月吉日

熊本大学熊本創生推進機構・教授
上野　眞也

地域づくり表彰事業等のコンテストで
好評価を獲得する方法

1. はじめに

地域団体等が地域づくり事業等の表彰事業やモデル事業計画の採択などに応募し、コンテスト形式で競い合う機会が増えている。たとえば農林水産省が昭和54年から実施している豊かなむらづくり全国表彰事業などがその一例である。そのコンテストで受賞をすれば、取り組みに参加している住民は誇りを感じ、更なる地域活動の活性化の励みにつながる。また全国から注目されることで、先進地視察として他地域との交流の機会も増え、その過程で自らの取り組みをさらに見直し向上を図る気づきを得る機会にもなる。新規事業採択では、新たな取り組みを開始するための補助金を獲得したり、行政からの事業バックアップが期待できる。

これらのコンテストは競争であり、その中で選ばれるためにはもちろんその中身が一番重要である。しかし併せて、注意して申請書作成やヒヤリング、現地調査の準備をすることで上手くアピールして加点を得、不要な減点を避けることが可能である。

本稿では、長年このような審査委員を務めてきた著者の経験と受賞団体の分析から、コンテストや審査会で好評価を得るための方法について考察する。事例として、農林水産省と公益財団法人日本農林漁業振興会が共催で実施する「豊かなむらづくり事業」を分析し、各受賞は、何をアピールし評価されたのかを確認する。また、なぜ受賞歴に大きな地域差が生じているかについて考える。その結果から、今後のコンテストに参加される団体や推薦書を作成される自治体等が配慮すべきポイントを整理して紹介する。

2. 豊かなむらづくり全国表彰及び農林水産祭受賞団体の特徴

⑴ むらづくり全国表彰事業での評価ポイント

「豊かなむらづくり全国表彰事業」は昭和54年から農林水産省と公益財団法人日本農林漁業振興会が共催で開催されてきている。「豊かなむらづくり全国表彰事業実施要領」に定められた評価事項は次のとおりである。むらづくりの取り組みのユニークさ、合意形成、推進体制、担い手の育成などが評価のポイントとなって審査されている。

1. むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況
　むらづくりの推進に当たって、その主体である集団等が地域の困難な自然的、社会的、経済的諸条件を克服してきた自主的努力と創意工夫の過程がすぐれていること
2. むらづくりについての合意形成の状況
　その地域の農林漁業の振興が地域の発展にとって基本的に重要であるとの認識のもとに、地域の農林漁業の振興を核とした総合的なむらづくりの推進についての幅広い合意が当該集団等の間で形成されていること。
3. むらづくり推進体制の整備・運営の状況

農林漁家を中心とし、非農林漁家を含めてむらぐるみでむらづくりを推進するための体制が整備されており、当該集団等による地域活動が長期的にも持続すると見込まれること。

4. むらづくりの地域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与状況

むらづくり推進の結果、むらぐるみの連帯感の醸成とコミュニティ機能の強化が促進され、地域の農林漁業の振興に著しく寄与しているとともに、その担い手の育成が図られていること。

5. むらづくりの豊かで住みよい農山漁村の建設への寄与状況

地域農林漁業の振興及びその担い手の育成とあわせて、地域における生活条件の改善・整備、うるおいのある人間関係の確立その他豊かで住みよい農山漁村の建設に著しく寄与していること。

⑵ 受賞団体の地域性

「豊かなむらづくり全国表彰事業」では、毎年各県から1団体づつ九州農政局に推薦がある。その推薦を受けて、九州管内で表彰と、全国表彰への1団体の推薦を行う。第1次のプレゼンテーション審査で3団体に絞りこんで現地調査が行なわれ、そのなかでも特に優秀なものが天皇杯等選賞審査対象事例 として全国表彰事業へ推薦される。全国8ブロックから推薦された事例の中から、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会長賞が選定される。これまでの九州各県の全国大会における受賞状況を見ると、図1のとおり圧倒的に鹿児島県の受賞歴が多い。他県のおよそ3倍の受賞確率である。平成20年度以降だけの受賞団体を見ても、表1のようにおよそ半分が鹿児島の地域団体となっている。なぜ、このような受賞の地域格差が生じているのであろうか。

鹿児島の風土や地域性が、他県に比べてむらづくり活動を抜きん出たものにさせているのか、申請やアピールが上手いのか、リーダーがすごいのかなど、いくつかの説明のための仮説が考えられる。次章で、平成20年以降の全国大会受賞団体のケースを詳細に見ることで、この疑問について考えていこう。

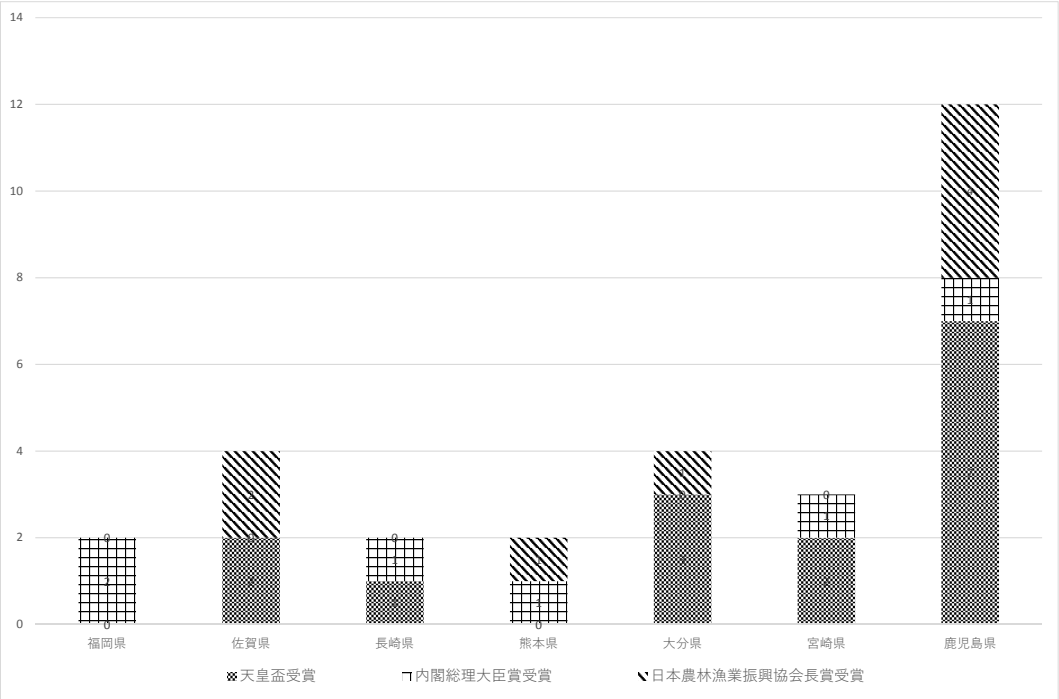

図1　九州各県の受賞歴

注）昭和54年から平成30年度までの受賞団体データから九州分のみ記載。

表１　年度別農林水産祭表彰歴

年度	賞	団体	市町村名
20	日本農林漁業振興会会長賞	川内野集落	佐賀県伊万里市
21	天皇杯	小城町農産物直売所「ほたるの郷」	佐賀県小城市
22	日本農林漁業振興会会長賞	特定非営利活動法人かまえブルーツーリズム研究会	大分県佐伯市
23	日本農林漁業振興会会長賞	久富木区公民館	鹿児島県さつま町
24	日本農林漁業振興会会長賞	現和校区	鹿児島県西之表市
25	天皇杯	田代自治体	宮崎県えびの市
26	内閣総理大臣賞	染ケ岡地区環境保全協議会	宮崎県高鍋町
28	内閣総理大臣賞	大野地区公民館	鹿児島県垂水市
29	天皇杯	阿室校区活性化対策委員会	鹿児島県宇検村
30	日本農林漁業振興会会長賞	中津川校区公民館	鹿児島県さつま町

注）平成 27 年は九州代表の全国大会での入賞はなかった。農林水産祭表彰の上位 3 賞である、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞のみを記載。

⑶ 地域づくり活動の概要とそのストーリー展開

平成 20 年から 30 年まで、九州農政局管内から推薦され、全国コンテストで上位 3 賞を受賞した地域のむらづくりの特徴を具体的に見ていこう。評価ポイントはあくまで筆者の受け止めであるが、いわゆるむらづくり活動として地域コミュニティの共同性や連帯、自立性が顕著に発揮され高いソーシャル・キャピタルが活かされている事例に鹿児島県の団体が多かった。奄美の宇検村は親子山村留学による移住者受け入れで、人口増、若返りを実現した。その意味で、良きリーダーと良きフォロワーが作り出す村の共同的一体感が、鹿児島では非常に強いものであることがわかる。佐賀では地産地消・直販所経営、大分ではブルーツーリズム、宮崎では若者・女性の U ターンや農業振興が評価された事例もあり、その時代における先進性、農村が抱える課題へ果敢に挑戦し実績を示している事例が高い評価を受けてきた。

①平成 20 年度受賞の佐賀県伊万里市川内野集落は、総人口 249 人、総世帯数 73 戸の村で水田を中心とした山村である。「元気でゴー GO!『世代を越えて 誰もが主役のむらづくり』」を合い言葉に、むらづくりを展開した。川内野集落は松浦党の末裔として山ン寺大祭や浮流など昔から続く伝統を守りつつ、山間農村の疲弊に立ち向かうため「このままではいけない。若い人がいなくなってしまう」「どうすれば若い人達が集落に定着するか」等について兼業農家の青年達が徹底的に話し合い、平成 6 年「コメ COME 倶楽部（こめこめくらぶ)」を結成した。この組織は区の自治組織のむらづくり活動の企画実践組織として活動するなかで、女性達が夢耕房農産加工グループを立ち上げるなど、集落のむらづくり活動がさらにアップグレードし活性化していった。山間部の小規模農村集落におけるストーリーの展開は、危機、葛藤、試行錯誤の苦労、そして多くの理解者と協力者を得て成功を積み上げていくという過程が、コンパクトに示され、全国の農山村のモデルとして優れた成果を挙げていると評価された。

②佐賀県小城市小城町農産物直売所ほたるの郷は、「地域の情報と人をむすぶ『ネットワーク型直売所』を核としたむらづくり」事業で天皇杯を受賞した。“ ものを売るだけの直売

所ではなく、人と人・都市と農村をむすぶ直売所”を理念に、食農教育活動や学校給食への食材提供、直売所を核としたグリーン・ツーリズムの推進などを展開した。17 年度から外食産業の企業で企画・販売の経験を持つ女性を直売所店長を迎え、取引農家や販路開拓、食農教育活動との連携がより活発になったことが受賞に繋がった。ほたるの郷の活動の拡大には JA との確執など様々な課題があったが、畑違いの出身であった女性店長が挑戦していった。そして地域の農産物を流通から、商品企画、販路開拓、食育まで結びつけた直販所経営が、生産者、消費者、地産地消の拡大などのむらづくりの目標を実現できる可能性を示したことが大きな評価となった。ここにも危機、葛藤、試行錯誤の努力、そして女性リーダーが賛同者を得て事業を拡大していく成功物語りがわかりやすく提示された。

③大分県佐伯市蒲江地区の「浦々の連携と多様な主体の参加による交流を核としたむらづくり」は、漁村の浦々の漁業者、水産加工業者、女性団体、環境団体、地域づくり団体などが設立した NPO かまえブルーツーリズム研究会が推進するむらづくり活動である。「食」「水産業」「海」をキーワードに、来訪者が住民と直接交流・体験しこれを学ぶ講座「あまべ渡世大学」を開講。この受講者等を受け入れる水産会社や民宿等で新たな雇用も生まれている。各団体の代表と地区住民が会員で、住民の 4 人に 1 人が活動に参加している。漁村の浦々の食文化の交流・伝承の活動は「おばちゃんバイキング」などにより新しい収入の場、高齢者の生きがいともなった。むらづくりを農業だけではなく漁村にまで目配せし、行政との連携も上手く組織化された漁村のブルーツーリズムが新鮮であると、選考で評価された。

④鹿児島県薩摩郡さつま町久富木区（くぶきく）公民館は、「『山・川・緑に人の愛』を合言葉に自然と人との絆によるむらづくり」を目標として、5 集落、人口 697 人、世帯数 302 世帯の公民館活動を母体として展開されてきたものである。農作業受託組合の活動から耕作放棄地対策へとその活動範囲を拡大してきた。他に例を見ない取り組みとして、毎月地区内全戸に配布されている「久富木区新聞」がある。この媒体は住民へのむらづくり活動の周知や合意形成に大きな役割を果たすとともに、他出された地区出身者にも配布され故郷との新たな絆づくりにも貢献している。また「十年後に桜を観る会」による桜の植樹活動、「おはんが一番久富木大賞」による地区の人材の発掘、「久富木ぴんコロ村一宿一飯活動」などの都市農村交流活動も活発に展開されている。いわゆる自律神経のある、住民一人ひとりを主役にしていく連帯感溢れるむらづくりは、むらづくりの全国モデルとして相応しいと評価された。

⑤種子島の鹿児島県西之表市現和地区は、人口 1,408 人、世帯数 689 世帯の農村地区で、「出せ知恵を！掘り興せ現和の宝を！！」をむらづくりの目標としている。行政が撤退していく部分を地域の力で補い、自分たちの生活を維持していこうという覚悟を持って、農業の振興、物産館や保育園の運営、伝統芸能や食文化の継承等、様々な活動を行ってきたことが特徴である。廃止が決まった保育園を住民だけで「社会福祉法人現和会」を設立し「現和みどり保育園」として運営を継続した。また高齢者対策として中学校跡地への特別養護老人ホームの誘致を行った。高齢化した農民の野菜を各家から毎日集荷し、街中にある現和物産館で販売するなど、地域自立の風土とアイデア溢れる工夫が、全国のむらづくりのモデルとなると評価された。

⑥宮崎県えびの市の田代自治会は、「この地には心を満たす「土」がある　心を潤す「水」

がある」をテーマに、「営農維持」「資源保全」「情報発信と交流」そして基盤整備事業に取り組んできた。田代自治会の地区は何の変哲もない農村地域であるが、そこに子育て世代になった子供たちが自分の育った故郷の環境で子育てをしたいとUターンし始めた。それに呼応して彼らの友人達も田代地区に移り住み定着してきた。そして集落の若者が団結し「ひまわりロードプロジェクト」を起こし、夏祭りの復活や、地域広報誌の発行、水車の建設、世代間の交流など次々と集落の活性化を牽引していった。人口減少・高齢化で集落の未来を悲観しがちな農村部にあって、若者達が再定住をはじめたという実績が、なにより素晴らしいむらづくりの成果であると高く評価された。

⑦宮崎県児湯郡高鍋町の染ガ丘地区環境保全協会は、「キャベツ農家のまちづくり」を展開している。この地区はキャベツ、白菜の一大産地化をなしてきたが、口蹄疫で堆肥が得られなくなった危機に際し、緑肥としてひまわりを500万本植栽して、「きゃべつ畑のひまわり祭り」を企画し、都市農村交流に大きな成果を挙げた。この逆境をチャンスに転じる活動に、女性、若者が大きな貢献をしたことが評価のポイントであった。かつて水田のある平野部が優良農地であったが、基盤整備後には台地上のキャベツ畑が大規模栽培の重要な農地となった。いまでは大きなビジネス収益が見込める農業に、若者が一所懸命に取り組もうとする姿は、むらづくりや農業の持続可能性において儲ける農業に挑戦していくという姿勢の重要性を示した。

⑧鹿児島県垂水市大野地区公民館は、もともと桜島の噴火で家や田畑を失った人々が移り住み開拓で切り開いてきた地区で、開拓者魂が連帯の基盤として今も生きている。地区の「開拓魂で未来を拓く挑戦者たち」のむらづくり計画は、標高の高い中山間地集落の衰退の危機に対処するため、「大野はこうありたい~10年後を見据えた地域再生計画~」をつくり、林業、つらさげ芋など特産品づくり、高地を活かした農林産物、大学生のむらづくりへの参画などを進めてきた。その結果、若者の定住や青年部の復活、NPO法人森人くらぶ、女性のアイデアを活かした6次産業化など様々な取り組みが誘発されてきた。開拓時代からの自治組織で、何事も皆で話し合って決め、助け立ってきた連帯感がむらづくりの本質を上手く実現していることが評価された。

⑨奄美大島の鹿児島県大島郡宇検村の阿村校区活性化協議会は、「『結い』の心でみんなでむらおこし」を合い言葉に、阿村小中学校の廃校の危機を乗り越えるためのむらづくりに取り組んできた。学校を守るには校区人口を増やすしかないと、全所帯が活動資金を寄付し「親子山村留学制度」を始めた。そして都市の親子を受け入れる住居として空き家を改修整備し、親子の移住受け入れを関東方面に情報発信したところ14世帯が移住してきた。その結果、小中学校の休校は免れ、住民の平均年齢も若返った。いまでは移住者も含めた生計の向上を目指してサトウキビ、タンカン、ニンニク栽培など農林水産業の振興活動も盛んになった。活性化協議会は現在U･Iターン者が6割を占め、会員の多くが女性である。移住者が中心となってむらを活性化する活動は、これまで類を見ないアプローチであった。他所者を受け入れ、結いの精神で協働売店の維持や住居や仕事を紹介しあい、移住者親子も島の住人になってしまうという地域共同体の進化形態としてユニークな事例であることが大きな評価を得た。ここにも危機に直面した住民達が、葛藤し、生き残るためにもがき、最後は確かな成功を手にするといったストーリーが、人々に感動を伝える物語として提示された。

⑩鹿児島県薩摩郡さつま町の中津川区公民館のむらづくりは、旧中津川村であった5集落で「400年の歴史を伝えるむらづくり」をテーマに取り組まれている。大石神社に奉納される「金吾様踊り」は、毎年の秋季大祭で各集落の若者が舞いを奉納し地域住民の紐帯の源であったが、高齢化人口減からその衰退が顕著となってきた。それに危機感を感じた住民は、区公民館を中心として住民総参加の話し合いを進め、「大念仏踊り」の復活などを住民の総意として盛り込んだ地域づくり活性化計画を策定し、農業者団体、青年・女性グループが連携を図り実践活動を展開してきた。また産業面でも種籾生産、肉用牛女性組織の「牛々さつまおごじょの会」、農作業受託組合、なかっこ日曜朝市、オリジナル焼酎の商品化など青壮年、女性が結束したむらづくりが活発に行われている。青年層の緊密な仲間関係、住民達のむらづくりへの参加意欲や動員力などを、様々な工夫によりコミュニティへの愛着や貢献意識へと醸成している点を上手く伝えており、共同主観的なレベルにおけるアイデンティティの強さは鹿児島の伝統的な強い風土が存在していることを感じさせる。

3. 事例に見られるむらづくりの実績とアピールの法則

主人公は何の取り柄もない平凡な人間で、運にも見放されている。このままでいいのか、でも無力な自分に何ができるのかと葛藤し、苦しむ。また次々に主人公には新たな危難や敵が襲いかかる。最初は無力感に打ちひしがれていた主人公が、何かのきっかけで変わろう、目標に向かって努力しようと決意する。もちろんその道は平坦ではなく、幾多の危機に直面し、挫折しかけるが、出会った友との友情に助けられたりしながら、次第に危機的状況を克服していき、ついに最後に愛に満ちた平和な状況を確立するというのは、ハリウッド映画のスターウォーズなどによく見られるストーリーである。もちろんこれは映画のシナリオとして、人々に感動をもたらすように場面が設定されたフィクションの話である。

しかし、むらづくりのコンテストというものも、やはり人に、地域の状況が困難に満ちたものであったが、皆で知恵と勇気を振り絞り、その結果一定の問題解決や状況の変化を遂に達成したという実績を、自分たちの「物語」としてうまく提示しなければならないという点ではシナリオ・ライティングと同様である。その過程では、現実の地域の葛藤がいったいどういうものであったのか、そして人々が力を合わせて困難に立ち向かう契機となったことは何か、どんな困難に直面したのか、それをどう乗り越えようとしてきたのか、その過程で得られた成果や学びは何だったのかといったリアルな地域の経験を、うまく言語化し感動のシナリオに編集して見せるということが求められている。

人に伝える地域づくりのストーリーを考えるには、まず自分たちのむらづくりのユニークさの根源は何なのかを自覚できないと物語として語ることができない。当然、地域づくり活動は、様々な取り組みの総合政策であり、あれもこれもやっていますという羅列になりがちである。しかし、羅列からは、地域の思想や哲学、人々の思いがうまく伝わることはない。このような点が多くの申請書に見られる準備不足の課題である。ユニークさの源は、地域のこだわり、独自の目標、価値観、守りたいもの、伝えたいものなど、地域住民に共有されている共同主観（間主観性）を説明できるかである。そのためには、それを言語化する努力が求められる。

次章では、物語の重要性に加えて、いくつかのコンテスト応募に際して配慮すべきことがらを紹介する。

4. 好評価を得るために準備すべきこと

⑴ 自分たちの取り組みの何が素晴らしいのか物語を明確にし、発表ストーリーをつくる

あれもこれも書き出せばよいわけではない。公表されている審査基準をよく読み、その項目に合わせて自分たちの取り組みの特徴、突出している点などの物語を設定する。紋切り型の地域紹介と、さまざな雑多な取り組みの羅列では、その地域の取り組みの特性は全く伝わらない。

⑵ 取り組みのユニークさ、現代的緊要な課題のマッチしていることを説明する

取り組み内容の審査にあたっては、そのユニークさ、斬新性、そして重要で緊要な課題に関わっていることなどが審査で評価される。自分たちの取り組みをこのような観点でどう表現しアピールするのか意識しながら申請書を作り、発表にあたってもこのような観点を整理して項目として説明することが、その評価を高めるものになる。

⑶ 申請書の書き方を工夫する

行政職員が代行して作成する場合もある。その際、行政文書のように網羅的にそつなく書いてあるが、そこに申請にあたっての熱意、訴えたいポイントなどの視点が欠けていることが多々見うけられる。

⑷ パワーポイントに振り回された発表をしない

プレゼンテーションを求められるとき、パワーポイントで説明する機会が増えている。その際、決められた時間内に何を伝えるかを十分に考えて発表するのではなく、資料に書き込んだことを全てスライドに貼り付け、平板にスライドに書かれたことを読むような発表がしばしば見受けられる。審査員は、申請書、そして発表資料を予め読んで審査に望んでいる。読み上げスタイルの発表は、いらいら感を増しこそすれ、よい印象を伝えるということにはまずならない。説明者が、自分に注目させ、自分の言葉で伝えようとする姿勢が重要である。パワーポイントを使うと、準備した図表に引きずられて、委員達に伝えるという姿勢を見失うことになる。そのような場合、パワーポイントよりも、かえってローテクの紙芝居方式とか、絵地図とかを示しながら語った方が印象的なことも多い。

⑸ 若者や女性などの当事者が生き生きと自分の言葉で語る

行政職員や地域の長老が説明しなければならないという必然性はない。地域の活発な活動を伝えるには、かえって若者や女性が、自分の経験や気持ちを込めて語る方が伝わることが多い。これはアナウンサー風に流暢にしゃべるということではない。当事者が自分ごととして生き生き伝えるための工夫、演出、そして練習が効果的である。

⑹ 多くの住民で審査会や現地調査に望み、意気込みや連帯感をアピールする

審査会や現地調査会が許すのであれば、できるだけ多くの住民が一緒に参加することが、地域のやる気、意欲、連帯感を伝えるのに効果的である。演出のためのお揃いの法被、のぼり旗やポスター、特産品の展示、地元の踊りの披露など地域性を印象づけるものはいずれも有効である。このような姿勢には、大きな地域性の違いがあるように思われる。鹿児島県、宮崎県は、熱い地域の情熱をこのような方法でアピールすることが上手である。

5. おわりに

コンテストでは、内容はよいのに申請書の書き方が悪かったり、プレゼンテーションが上手く練られておらず、よい点をうまくアピールできなかったり、現地説明が準備不足で評価して欲しいポイントを外していたなどがよく起きる。また審査員はこの地域のこの事柄はすごい・面白いと思っても、地域の人たちがそのよさに気づいておらず別のことをアピールされることもしばしばある。審査員の立場では、どういう理由でこの団体を選定しようかと実は頭を悩ましている。うまく良さをアピールしてくれないかと祈るような気持ちで聞いている。つまり、申請者はこれを評価して欲しいということを自覚して、しっかりそのことを物語の中でアピールすることが大事である。また今後の発展への意思なども加点材料になる。

表彰推薦は、時に、地域づくりが始まったばかりでまだ成果が見えない段階で申請がなされることもある。もう数年経って成果が出た段階で推薦されたら表彰されたのではないかと残念に思う場合もある。推薦団体となる県や市町村には、地域の取り組みの機が熟したタイミングを上手く捉えて推薦を行うことを求めたい。また他分野でも表彰された経験を持つ団体が、別の表彰事業に推薦される場合もあるが、往々にしてその前に評価を受けた点がそのまま成果としてアピール材料にされていることがある。コンテストが狙っている意義に焦点を当てたアピールが肝要であり、それぞれの要項が評価のポイントとして定めている観点に留意して、相応しい内容に微修正することが必要である。

つまり評価されているのは、申請書作成、プレゼンテーションから現地調査までの、総合的なまちづくり力の認識力とアピール力ということができよう。

いまや地域づくりでは、外部とのコミュニケーションがとても大事になっている。自分たちの地域を知り、その強み、弱みを言葉にできるようによく考え、住民間で共有し、その理念を練って取り組みとして具体化していくことが、地域づくりのさらなる展開にも大事なことであると考える。

参考文献

1) クリストファー・ボグラー , デイビッド・マッケナ『物語の法則 強い物語とキャラを作れるハリウッド式創作術』アスキー・メディアワークス、2013 年。
2)「むらネット九州」農林水産省九州農政局、各年度版。